

Title	昭和三十二年春期史學科見學旅行記
Sub Title	
Author	小谷, 俊彦(Kotani, Toshihiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1957
Jtitle	史学 Vol.30, No.2 (1957. 11) ,p.131(267)- 133(269)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19571100-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の天才的直観を、理論体系的なものに押しひろげてゆかれる文字通り後継者としての著者が要領よく、且つ親身に日本人の藝能を説かれたものが本書であつて、十巻を以て終る予定とされる本全集中でも、もつともユニークな價值をもつものとなることを信じて疑わない。非才をも顧みず大方に推す所以。B5特大版 一九五七年六月刊

伊藤清司

彙報

昭和三十一年度春期史學科見學旅行記

六月二日、鎌倉見學のため北鎌倉驛に集合、一行は淺子、河北、森岡三先生はじめ先輩飯田茂登夫氏（大正十三年卒）に學生を合せて二十九名。

まず驛のすぐ傍の圓覺寺へ向う。同寺は弘安五年（二二八二年）北条時宗の開基にかかり、開山はその招聘に應じて來朝した宋の佛光禪師（無學祖元）である。寺は弘安十年以來度々火災にあい、創建當初の建造物は舍利殿（國寶）のみで、現在の建築は殆んど江戸時代のものである。圓覺興聖禪寺の額を掲げた山門も江戸時代の

ものではあるが、禪宗建築の特徴を余すところなく示している。ここで淺子先生より、その柱が礎盤の上に立つて粽を有すること、肘木の下端の丸味を帯びた曲線、斗拱は詰組の方式を用いて、墓股、束の見られないこと、檼の様式、尾檼先端が和様のそれとちがつて鋭く尖つていること、花頭窓や扉の軸をうける藁座等細部にわたる説明をきく。山門より佛殿跡を経て舍利殿へ進む。この建物は弘安五年の造立で、わが國現存最古の禪宗建築として廣く知られているが、その美しい姿を柵越しにしか見られなかつたのはまことに残念であつた。再び山門横へ戻つて鐘樓の丘へ登り銅鐘（重宝）を見學する。この梵鐘は北条貞時が大檀那となり正安三年（一一三〇八年）に鑄造されたものである。

圓覺寺より徒歩で建長寺（開基北条時頼開山宋僧蘭溪道隆）へ向う。京都般舟三昧院の建物を移建した總門巨福門を中に入ると巨大な山門が眼前に立ちふさがる。これは寶曆五年（一七五五年）の建立で、後深草天皇宸筆と傳える「建長興國禪寺」の大額を掲げた重層銅板葺の堂々たるものである。

巨福呂坂切通を経て裏參道より鶴岡八幡宮に詣り、大石段を下りて左折し鎌倉國寶館へ入る。鎌倉、神奈川縣下の社寺及び個人の寶物がこの校倉式の建物の中に保管陳列されているが、繪畫、彫刻、美術工藝品等佛教關係のものが大部分を占めている。ここで再び淺子先生から鎌倉時代の彫刻、特に佛像に關して、その様

式上の特徴その他について説明を受ける。數多い陳列品の中から著名なものを探り上げれば、裸辨天で名高い鶴岡八幡宮の木彫辨財天坐像(文永三年銘重文)、明月院の木彫上杉重房坐像(室町初期重文)、圓應寺の初江王坐像(建長三年作の胎内銘あり重文)等があり、何れも極めて寫實的でこの時代の特色をよく示している。

晝食後八幡宮前からバスで覺園寺へ向う。鎌倉宮前で下車し坂道を辿る事十分余、寺域はまことに閑寂、まず地藏堂へ案内され俗に黒地藏と呼ばれる木彫地藏菩薩立像(重文)を拜する。本像は「地獄を廻り罪人の苦みを見るに堪えず自ら獄卒に代りて火を焼き罪人の苦患を助く故に黒く煉れ」「數度彩色を加うれども一夜の内に元の如く黒色に變する」と傳えられ、無住法師の「沙石集」に奇瑞が語られてをり、鎌倉時代の優作である。次いで佛像を見學する。本尊薬師如來坐像及び兩脇侍像の三體(重文)は木彫で運慶作と傳え、その左右に等身の十二神將像を従えてゐる。本尊の薬壺は他のそれと趣を異にし、珍しく感じられた。本寺の由來は建保六年(一二二八年)北條義時の開創にかかり、後永仁四年(一二九六年)貞時の本願によつて一寺となし覺園寺と稱したもので、現堂宇は文和三年(一二五四年)尊氏の建立になり、内部に「當時佛殿虹梁銘位署事故更所染筆也」なる尊氏の筆跡を見ることができ

る。本堂背後の林の中に開山心慧智海、二代大燈源智の供養のため

の寶篋印塔(二基共に重文)があるが、これは三代慶應が造立したもので、共に正慶元年(一三三三年)の銘があり、それぞれ高さ約三・六米の大きなものである。寶篋印塔の上部は塔婆の相輪とほぼ同形式で、塔身側面の各區に一字ずつ梵字が刻まれているのは、八大菩薩をあらわしたものとわれ、これは余り例の無い表現で一般にはこの部分に梵字は見られないようである。同寺には他に太陽をかたどつた光背を持つ愛染明王坐像(鎌倉期の作)、俗に試みの不動と呼ばれる鐵製不動明王坐像、薬師如來の形式を採つた阿闍佛等がある。なおこの境内裏山には俗に百八矢倉と稱せられて、鎌倉後期に納骨所として利用された岩窟が多い。

瑞泉寺は嘉曆二年(一三三七年)夢窓國師の開山、開基は足利基氏である。今日見るべきものはわずかに開山堂安置の夢窓國師の木像(重文)及び國師作るところと傳えられる林泉のみである。前者は高さ約一米、兩手を膝の上に置き靜に前面を正視し、恰も禪定に入るが如く氣品高き國師の風貌を活寫してをり、黒漆塗の曲糸と共に室町時代の優作である。さて林泉は、北に天臺山西に富士山を遠景とする簡素なものであるが、雅趣に富み國師作庭の眞偽はさておき、室町期のものとしては疑うべくもないとのことである。林泉の背後の急な石段を登り、更に雜木林の中の小徑を辿ると錦屏山の頂扁界一覽亭址に達する。現在の建物は新しい建築であるが、扁界は折からの西日に照らされて青葉若葉が綾を織りな

して、遠く雲霞と連なり薄れすばらしい景観であつた。

最後に天平六年（七三四）行基菩薩の創建と伝えられる杉本寺へ向う、徒歩約二十分。仁王門を入り石段を登ると正面に本堂がある。堂内正面の厨子内に木彫十一面観音立像が三昧安置されている。中央は慈覺大師の作と伝え、相好圓滿莊重左は惠心僧都の作と伝え、兩手に來迎の印を結んで上下に分ち、その姿體極めて優美である。この二昧は重要文化財に指定され、共に藤原末期の様式を示している。右の古拙な像は行基の作と伝えられる一木造である。同寺は「吾妻鏡」に「大藏觀音堂」と見え、頼朝、政子及び實朝がしばしば參詣した記事や、文治元年（一一八五年）の條には「夜に入つて大倉の觀音堂回祿す。別當淨臺坊煙火を見て悲歎し、焰の中に走り入つて本尊を出す、衲衣纔に焦げたりと雖も身體敢て恙なし」とあるのは今に残る中央の本尊のことであろう。斯くしてせまり來る夕闇と共に有意義な一日の見學を終えたのである。

（小谷俊彦記）

三田史學會例會報告

第四四八回例會 昭和三二年七月四日 於七番教室

山 と 水 淺子勝二郎氏

第四四九回例會 昭和三二年一月七日 於九番教室

アメリカに於ける中國研究 石川 忠 雄氏